

# 一葉の愛

## 一葉日記における愛の世界\* 一

朴那美\*\*

---

### 目次

---

はじめに

1. 戀の芽生え

2. 悲戀物語

3. 女の戀

むすび

---

### はじめに

一葉が残した小説は二十二編(うち一編は未完)である。生前刊行されたものとして、他に『通俗書簡文』(博文館 明治29年5月)がある。この他隨筆は『そぞろごと』(四編)、『すくろごと』(一編)と、短歌十首が生前発表に加わっている。

死後十數年を経て、日記(『一葉全集前編』馬場胡蝶編・博文館・明治45年5月)、續いて短歌3760首(『一葉歌集』佐々木信綱・博文館・大正元年11月)が世に紹介された。このあと徐々に發掘増補を経て、小説の未完稿、斷片、書簡を含め現在では一葉の仕事のほぼ全貌が窺える形になっている。

このうち、小説と並んで一葉文學の中樞をなしているのが日記である。木村眞佐幸氏は

そもそも日記とは何か -----

いま假に、日本近代文學史上に多くの彩りと話題を提供しているものをあげても、その数は優に十指をこえる。例えば、鷗外の『獨逸日記』を中心とするあの膨大な記録をはじめ、自己觀照的懺悔録で、しかも若き日の魂の告白ともいえる國木田獨歩の『欺かざるの記』、病の床にありながら超逸冷徹の視線で己れとその周辺を時にはユーモア巧みに描いた、いわゆる隨想的性格の濃い子規の『仰臥漫録』、『病床六尺』、『墨汁一滴』。はたまた日記によって自己の對話を繰り返し、そこに自分の救いを求めた若い女性のロマンともいえる一葉の日記、そして石川啄木の『ローマ字日記』、『志賀直哉日記』、永井荷風の『斷腸亭日乗』、『小林多喜二日記』、さらには全八卷、各四百數十ページに及ぶ『高見順日記』、あるいは大岡昇平の『作家の日記』等々、文字通りそこには人間の、“生きざま”が激しく波打ち、書き手の人生觀、世界觀が行間に溢れ、時には無韻の詩が奏でられて讀む人の感動を誘い魅了させる。(木村眞佐幸『日記の虚實』-鷗外、一葉文學の基底、『リベラル・アーツ』平成5年1月 p148)

---

\* 이 논문은 상명대학교 교내연구비로 연구함

\*\* 상명대학교 교수 일본근대문학

と言っているように、一葉の日記も近代文學史上貴重であり、一葉の人と文學を知るうえでも、最も有効な資料となっている。

周知の通り、一葉の日記としては十六歳の時の「身のふる衣まきのいち」から二十五歳の「みづの上日記」まで四十四巻が公刊されている。これら約十年間の記録のなか、初期の王朝ぶりの物語日記・隨想日記・實務日記と斷片を除いては、明治二十四年四月、數え歳二十歳のおりの「若葉かげ」から明治二十九年七月、數え年二十五歳のおりの「みづの上日記」まで、足かけ六年にわたって、ほぼ連続している。この日記群の主なテーマに關して、

一葉日記は、すべて自身と桃水とを主人公とした戀愛の、實名小説ともみなされる性質の日記だったと言っても、それほど言い過ぎではないかもしれない。

(關良一『樋口一葉 考證と試論』有精堂 昭和45年0月 p177)

という見解からも分かるように、一葉日記は、彼女の戀愛觀を理解するための貴重な資料としての意味を持っていると言えよう。

また、

一葉の日記は、日記という形態を借りた長編の私小説と言えるだろう。

(和田芳恵『一葉の日記』福武書店 昭和61年3月)

と、一葉の日記が日次の記録の域を越えて私小説であるという見解も示されている。これは一人の女性の生涯の記録がまさに小説的であったことを示しており、日記の内容なり主題たるものから彼女の人生觀、人間像が読み取れるとの解釋ができよう。

一葉の日記は多様な文体、二重的な構造、それから「日次の日記」「文學日記」「戀愛日記」といったさまざまなテーマをもっており、一様に扱うには難しいと言われる。本論文ではこのような多様性を認めつつ、特に一葉の戀愛觀に注目して、愛が日記のなかでどのように書かれているかを見、それが一葉の小説作品の中でどのような意味をもつものであったかを考察していきたいと思う。

## 1. 戀の芽生え

一葉の日記には、明治24年4月から26年7月にいたる期間に「蓬生日記」の題をもつものが七巻あり、その直前に「若葉かげ」「わか艸」各一卷、それと平行するものに、「日記」(「につ記」など)八巻、「しのぶぐさ」四巻(その最初の一巻だけは「日記しのぶぐさ」)がある。これらは、いわば本郷菊坂時代の日記群を形作っている。この日記群の題名は、父の死後、世帯主になった一葉が母親と妹とともに本郷菊坂に轉居、洗い張り、仕立て物によって生計を営んでいた時期のみすぼらしい暮らしが、王朝ぶりの言葉で、蓬生の宿と觀じられたのであろう。

『源氏物語』の「蓬生」巻で活躍する代表的な人物といえば末摘花である。父親を失って經濟破綻の状況でもプライドをもって、ひたすら父親からの遺産を守りつつ源氏の來訪を待ち侘びる姫君。人々に

嘲笑されても持ちつづけた高潔な精神は、彼女の廢れた暮らしとともに崇高にまで書かれて、後には源氏の庇護をうける彼女の一人となる。この末摘花の境遇と一葉のそれと似ていると思われる。

この時期の一葉の生活は大変苦しく、洗い張りや仕立て物など一ヶ月の収入は八円ぐらいで、戸主の一葉は何とか生活の打開の道を考えなくてはならなかった。小説家志望の決心の直接動機となったのが田辺花圃であった。

花圃は坪内逍遙の後立てで、当時の一流出版社で『都の花』を發行していた金港堂から處女作『藪の鶯』が發行されて文壇に登場し、原稿料を三十三円二十銭を得た。

一葉が生活の苦しさを打開するため、小説家になろうと決心するまでの事情を邦子は、「かきあつめ」の中で次のように言っている。

「借錢はかさなる、浮世のことをば知らざりければ、友なる人の知人に、心やさしき小説家のあれば是非に何かした々めよ、さすれば母にも安心させることのあらんとす々めける。女の身として、そのやうの事は心くるし。又中島へたのみ置たることもあれば、いかにせばやと案じわずらふ。されど眼前ことにせまり居ればはじをしのびて、明治廿四年四月十五日、友なる人の紹介にて、半井君のもとをとひ初にき」

(鹽田良平『樋口一葉』吉川弘文館 昭和85年7月 p63)

小説を書きたい一葉には、花圃のような後立てがなかったけれど、妹の友人野々宮きくの紹介で、「朝日新聞」の小説記者ということだけで半井桃水に入門することになった。「蓬生日記」の直前の(「若葉かげ」の明治二十四年四月十五日)の日記に、桃水との初対面の記録がある。

十五日 雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしが、かねて紹介の勞を取たまはりたる半井うしに、初めてまみえ參らする日也。ひる過る頃より家をは出ぬ。君が住給ふは海近き芝のわたり南佐久間町といへる也けり。(中略)「兄はまだ歸り侍らず。今暫く侍給ひね」と聞え給ひぬ。「誠や、君は東京朝日新聞の記者として、小説に雜報に常に君があづかり給ふ所におはせば、さもこそはひまもなくおはすべけれ」と思ひつゞくるほどに、門の外に車のとまるおとのするは、歸り給ひし也けり。やがて服など常のあらため給ひて出おはしたり。初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならばねば、耳ほてり唇かわきて、いふべき言もおぼへずのぶべき詞もなくて、ひたぶるに禮をなすのみ成き。「よそめいか計おこなりけん」と思ふもはづかし。

こうして一葉が桃水に入門しようとしたのは、實は小説をすぐに金にするためには新聞社社員である桃水は絶好の伝手と思ったからである。初対面の桃水の目に映った一葉は、

私が樋口さんと相識したのは樋か明治二十三年頃であつたと思ひます(中略)。昔の御殿女中がお使者に來たやうな有様で、萬に一つも生意氣と思はれますまいか、何うしたら女らしく見えるかと、夫のみ心を碎かれるやうでありました。

(和田芳恵『近代文學鑑賞講座 第三卷 樋口一葉』角川書店 昭和33年11月 p223)

とあるように、必要以上に緊張していた一葉の様子が窺われる。

當時二十歳の娘であった一葉は初対面の桃水に対しての印象はどうであつたろうか。

君はとしの頃三十計にやおはすらん。姿形など取立てしるし置んもいと無禮なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと白く面でおだやかに少し笑み給へるさま、誠に三才の童子もなつくべくこそ覺ゆれ。丈けは世の人にすぐれて高く、肉豊かにこえ給へば、まことに見上ぐる様になん。

(「若葉かげ」明治二十四年四月十五日)

と書き連ねてあり、かなり好感を持っている様子が窺われる。桃水は美男子であり、年も若く才能もある上に獨身であったが、何よりも決定的に一葉の心を打ったのはその人柄であった。

君が小説をかゝんといふ事譯、野々宮君よりよく聞及び侍りぬ。さこそはくるしくもおはすらめど、しばしのほどにこそ、忍び給ひぬ。我れ師といはれん能はあらねど、談合の相手にはいつにても成なん。遠慮なく來給へ」と、いとねんごろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにも、まづ涙こぼれぬ。

(「若葉かげ」明治二十四年四月十五日)

このように桃水の親切にひとしおの感激をしている。

一葉の初戀の人と言われている半井桃水は本名を洸といい、一葉が初めて會った時は三十二歳、朝日新聞社員でその紙上に、毎回繪入りの大衆小説を書いていた。家は代々医を業とし、對馬の宗家に典医として仕え八十石を賜っていた。桃水はその長男として生まれ、十一歳の時に上京、共立學舎に學んだ。三菱・大阪魁新聞などを経て、明治十五年七月、友人の若菜胡蝶園の推薦によって朝日の特派員となり、京城事變の動亂のありさまを伝えて、その敏腕を買われたという。翌年釜山で成瀬もと子と結婚したが、明るく年死別、以來獨身を通していた。東京朝日に入ったのは魁新聞時代の知己小宮山天香の知遇によるものであった。

彼は當時一家をかまえて、妹幸、弟浩、茂太と幸子の學友鶴田民子を南佐久間町一丁目二番地に同居させていた。女中もおき二人の弟子畑島桃蹊、小田果園を抱えて、派手好きな桃水の生活は必ずしも樂なものではなかった。お金が入ると遊蕩もしたし、そのうえ父の殘した負債も多かった。美男で、遊び方もうまかった。

(福田清人・小野美紗子『樋口一葉』清水書院 昭和41年5月 p40)

桃水が書いているのは通俗小説であるので、文學的には、師とするに足るとは考えられないが、父は既になく、長兄もなく、次兄は不遇で孤獨な境涯にある身、母と妹をかかえて大胆にも小説をもって生活救急打開の方途を決めた一葉にとって、家と萩の舎という生活圏の中で、本當の意味で話せる人、頼れる人が必要だったかも知れない。そのような境遇にあった一葉には、桃水のやさしく、親切な言葉に涙がこぼれるほど感動されたのであろう。

一葉の日記の魅力は、やはり小説家志向を固めた桃水との初對面の明治二十四年四月十五日以降からであろうと思われる。それは、姉弟子であった田辺花園に刺激され、苦しい生活から逃れようと始めた小説がきっかけで、貧乏脱出の明るい光とともに乙女のどきめきした戀愛が芽生えたからであろう。

さらに數日後桃水を訪問したときの日記には

例の午後より、なから井うしをとふ。種々のもの語りども聞えしらせ給ひて、「先の日の小説の一回、新聞にのせんには少し長文なるが上に、餘り和文めかしき所多かり。今少し俗調に」と教え給ふ。「猶さ

まざまの學者達をも紹介し参らせんなれど、いさゝかさわる所なきにしもあらねばやみぬ。されど、吾友小宮山即眞居士は良師ともいふべき人なれば、此君のみには引合せ参らせん」などの給ひ聞ゆ。「昨夜かきたる丈の小説の添冊給へ」と差置たるまゝ、此日は早う歸りぬ。人一度みてよき人も二度めにはさらぬもあり。うしは、先の日ま見え参らせたるより、今日は又親しきまさりて、「世に有難き人哉」とは思ひ寄ぬ。

(「若葉かげ」明治二十四年四月二十二日)

一葉が小説に志し桃水に身を寄せたのは、主として生計をたてるためであり、桃水もよく其の事情を了解し、一葉の身上には同情したが、このような、王朝女流文學風の内容・文体の作品では新聞小説にならないから、もう少し俗調にするようにと忠告した。この日の日記には一葉の頼りになる人を求めようとする心と、女性としての男性に對する思慕の心が重なっているのではないかと思われる。また、桃水から小説のことで相談があるからという手紙をもらって表神保町の下宿を訪ねた時の日記からも覗かれる。

「それより先に今日はまつ君に聞え置度事ありて」との給ふ。「そは何事にか」と問ひ参らすれば、「いなとや、餘の事にもあらず。餘や、いまだ老果たる男子にもあらず。君はた妙齡の女子なるを、交際の工合甚だ都合よろしからず」と君眞に迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へば、おもて火の様に成ておのが手の置場もなく、只恥がわしきをもておほはれたり。猶の給はく、「よりにて吾れ一法を案ぜり。そは外ならず。餘は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合をもなすべければ、君は又餘をみるに青年の男子也とせで、同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひぬ」と聞え給ひて打笑みたり。「我が家の貧なるをも君しろしめし給ふものから、もし差つかゆることもあらば何にても言ひおこせよ。和身に應ずる事は心の限りなしてん」などの給ひて、君が貧困の來歴など残るくまなくつけ給ふにも、様々思ふこと多かり。ひる飯又君がもてなしにあづかりて、家にかへる。

(「若葉かげ」明治二十四年四月二十五日)

一葉は、訪れるたびにますます桃水に惹かれ、單に小説の師としてだけでなく、一人の異性として見るようになっていくのである。一葉は焦りながら、多くの習作を流産し、桃水に入門後ほぼ一年たった明治二十五年三月二十三日発行の桃水主宰の雑誌『武藏野』の創刊号に、一葉の名で『たけくらべ』の原型とも言われる『闇櫻』という短篇を發表することができた。隣同士の中村千代という十六歳の美少女と、園田良之助という二十二歳の某學校の通學生。かれらは幼馴染みであり、兄妹のように仲むつまじく育ったが、梅見をかねて摩利支天の縁日の夕べ、連れ立って出掛けたとき、千代の級友に「おむつまじいこと」と冷やかされる。このときから千代はもの思う身となり、ひたすら良之助を戀いこがれ、その氣持ちを打ち明けることもなく、ついにはかなくなってしまう。死ぬ際に見舞いにきた良之助に、「お詫は明日」と言い残し、「風もなき軒端の櫻ほろとこぼれて夕やみの空鐘の音かなし」で、この作品は終わる。題名も、末尾の一文からつけられた。

千代が「今は何事も思はじ、思ひてなるべき戀かあらぬか、言ひ出して爪はじきされなん。恥かしさには再び合す顔もあらじ、妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ。終のよるべと定めんにいかなる人をとか望み給ふらん。……」と思っているところは、一葉日記「若葉かげ」の明治二十四年四月二十五日の敘述と類似する。この日、桃水をたずねた一葉は桃水から「余は君を目して我が旧來の親友同輩の青年と見なして萬の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子也とせで、同じ友がきの女子とみ給ひて隔てなく思ふ事の給ひぬ」と言われた。あの日以後、一葉の桃水を慕う氣持ち

は高まる一方であり、そのために痛切な知己嫌悪におちいる時さえもあった。そういう彼女の桃水に寄せる切迫した愛情が、ここでは千代の心情に託されている。瀧藤満義氏は「『闇櫻』が小説に形を借りた桃水への戀文だという定評も、あながち通ぶった読み方とのみ言い消せないであろう」(瀧藤満義『一葉文學生成と展開』明治書院 平成10年2月 p43)とのべられているが、片戀娘の千代の戀わずらいの心情は、まさに一葉の心情そのものであると讀める。

一葉は、つづいて『武藏野』第二号(明治二十五年四月十七日發行)には『たま櫛』、第三号(明治二十五年七月二十三日發行)には『五月雨』が發表されている。『たま櫛』では一人の女性を二人の男性が戀するという構想であり、『五月雨』では、二人の女性が一人の男性を戀するという構想で、『五月雨』は『たま櫛』の男女を入れ替えただけのもので、主題にも新鮮さが乏しく、三者三様の愛するものへの片戀の苦惱が描かれたのは、『たま櫛』と同様である。

ところが、『武藏野』は出版社の都合によって廢刊することになり、一葉にとっても經濟的にほとんど何の足しにもならないまま三号をもって終わることになる。その間桃水の紹介により『改進黨』に(明治二十五年四月)、十五回の連載小説として『別れ霜』を發表する機会を得た。これは、一葉にとって初めての新聞小説であり、發表順からすれば『闇櫻』に次いで二番目の作品である。

『別れ霜』は、お高と芳之助という商家同志の二人の許婚が、それぞれの家のなりゆきから、敵同士のような立場になり、想いをよせながらも引き裂かれて行かなければならない、という筋のものである。

これらを合わせれば一葉は桃水の門下に入って書いた四作、即ち『闇櫻』『たま櫛』『五月雨』『別れ霜』を順調に發表したことになる、これは、文壇の出発点に立っていた一葉にとっては大変幸運なことだといえよう。

この時期の愛の姿は、男女ともに愛を希求しながら、戀心を相手に打ち明けられずに消極的な結果に終わっていくのが共通しており、これは一葉が桃水に想いを寄せていた心情が作品にあらわれたのであろうことは、先述したかずかずの日記によって窺われるところである。

## 2. 悲戀物語

桃水との交際が萩の舎の中で問題になり、師の中島歌子の戒告、友人の伊東夏子の忠告などにもとづいて、一葉は桃水と一応絶交の形をとらされることになる。その時、歌子と相談した記録を日記に綴っている。歌子は、

實は、その半井といふ人、君のことを世に公に『妻也』といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ。(中略)もし全く其事なきならば、交際せぬ方宜るべし

(「日記しのぶぐさ」明治二十五年六月十四日)

と言い、その時一葉は、

我一度はあきれもしつ、一度は驚きもしつ、(中略)成らばうたがひを受けしこゝらの人の見る目の前にて、其しゝむらをさき肝を盡くして、さて我心の清らけさをあらはし度、とまで我は思へり。(同上)

のように、桃水に対する嫌悪というよりも、他の人々、特に萩の舎の人々に軽蔑されたということへの悔しさの方が大きかったようである。「我心の清らけさをあらはし度し」という気持ちからついに離別の決心をして桃水の許を訪れる。

『君群と我れ、まさしく事あり』と誰も誰も信ずめる。いひとかんとすれば、いとくしくまつはりて、此無實の名晴るべき時もあらじ。我身だに清からば、世の聞えはくかるべきにも非ずとおもへど、誰は置きて、師の手前によりてうとまれなどせられなば、一生のかきんに成べき、それ愁はしう、と様かうざまに案じつれど、我、君のもとに参り通ふ限りは人の口ふさぐこと難かるべし。依りて今しばしのほどは御目にもかゝらじ、御聲も聞じとぞおもふ。

と言いながら、心の中は

猶目の前に心は引かれて、此人いふことごとくに哀に悲しく、涙さへこぼれぬ。我なから心よはしや。  
(「日記しのぶぐさ」明治二十五年六月二十二日)

と思うのである。一葉の戀はここにて悲戀物語に変わる。しかし、會えなくなってからは一葉は一層桃水を戀しく思い悩むのである。

ある時は厭い、ある時はしたひ、よ所ながらもの語りきゝて胸とゞろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ盡くして迷夢いよいよ闇かりしこと四十日にあまりぬ。七月の十二日に別れてより此のかた、一日も思ひ出さぬことなく、忘るゝひま一時も非ざりし。今はた思へば、是ぞ人生にかならず一度は來るべき通り魔といふものゝ類ひ成けん。道にかんがみ良心に問へば、更に更に心やましきことなく、思ひわづらふふし更になし。我徳この人の爲にくもらんとして、却りてみがゝれぬ。いでや、これよりいよいよみがきて、猶一大迷夢見破りてまし、と思ひ立しは八月の二十四日、澁谷君に訪はれし翌日成けり。

(「につ記」明治二十五年五月二十九日の條の後)

それから戀愛に對する思いも深くなっていく。

その後約一年の間戀に悩まされていた事が一首の歌に託されている。

我かくうたふ。但し、心の中也。吹風のとよりはきかじ萩の葉のみだれて物をおもひもぞする  
(「しのぶぐさ」明治二十五年八月七日)

また、「道しばのつゆ」二十五年十一月十一日には、絶交後初めて桃水を訪問した時の記録がある。

番町より車にて三崎町にいそぐ。北風いとつよく、身をさす様也。月日隔てゝものぐるほしきまでおもひもみだれたるを、君はさしもおぼさじかし。心にもあらぬようやうなる別れのその折は、さまざまいひさわがれたる人ごとのつらさに、何ごとをおもひ分くるいとまもなかりしを、今さらにとりかへさまほしうおぼゆるぞかひなき。はじめよりにくからざりし人の、しかも情けぶかうおもひやりのなみ成らざりしなどおもひ出るまゝに、「何故にかく成けん。身はよしや、さは大かたのよにつまはじきされな

んとも、朝夕なれ聞こえなましかば、中々にいけるよのかひなるべきを」など取りあつむれば、人も我もよの中さへもいとにくしかし。

一葉にとって戀がどんなものであったかを語っていると同時に、一葉の悲觀的な戀愛觀をほのめかしている。

### 3. 女の戀

一葉は、明治二十七年五月一日、大音寺前から本郷丸山福山町に轉居した。これ以降、亡くなるまでの丸山福山町時代の日記に、大体において「水の上日記」(あるいは「水の上」など)と題されている。その題名の典據は、

丸山福山町の家客間として使われた八疊間の東側の障子戸を開くと、見下ろしの位置に三坪ほどの池があり、向かいに隣の家が芭蕉が葉を廣げていた。題名はこの池に因んでいるが、これも暗喩であって、「舟」と意識した自分の存在場所を表現している。二十七年四月末の伊東夏子あての手紙(書簡46)は、龍泉寺の店を閉じる決意を伝えて、「蘆の一葉にのりて舟遊山したる達磨大師」を引き、「行みづのうきよは何か木の葉舟ながらるゝまゝまかせてをみん」と書かれているほか、『にごりえ』が評論界の賞賛を受けた時期の記述にも「舟は流れの上のりぬかくれ岩にくだげざらんほどは引きもどす事かたかるべきか 極みなき大海原に出にけりやらばや小舟波のまにまに」とある。(前掲『樋口一葉事典』p111)

流れにまかせる舟のように人生は運命に身を委ねる諦めの中に生きるものだと悟ったと理解してよいだろう。

桃水と別れて二年後の明治二十七年の日記には、次のように記されている。

「諸事はみな夢、この人こひしとおもふもいつまでの現かは。我れにはかられて我と迷ひの淵にしづむ我身、はかなし」と、あきらめたる事もありき。そもそも思ひたえんとおもふが我がまよひなれば、殊更にすつべきかは。冥々の中に宿縁ありて、つひにはなれがたき仲ならばかひなし。見ては迷ひ、聞てはこがれ、馴ゆくまゝにしたふが如き我れならば、遂に何事をかなしとげらるべき。かく計したはしく、なかしき此人をよそに置て、おもふ事をもかたらず、なげきをももらさず、おさへんとするほどにまさるころは、大河をふさぎてかへつてみなぎらするが如かるへし。悟道を共々にして、兄の如く妹のごとく、世人の見もしらざる潔白清浄なる行ひして、一生を送らばやとおもふ。

(「水の上日記」明治二十七年七月二十日)

自分なりに桃水への戀心を清算している。

また、「水の上日記」明治二十七年四月二十二日に戀の記述がある。

うき世にはかなきものは戀也。さりとて、これのすてがたく、花紅葉のをかしきもこれよりと思ふに、



いよいよ世はなかなき物也。等思三人、等思五人、百も千も、人も草木も、いづれか戀しからざらむ。深夜人なし。硯をならして、わがみをかへりみてほゝゑむ事多し。にくからぬ人のみ多し。我れは、さはたれと定めてこひわたるべき。一人の爲に死なば、「戀しにし」といふ名もたつべし。萬人の爲に死ぬればいかならん。しる人なしに、怪しうこと物にやいひ下されん。いで、それもよしや。

この時の一葉は、もう戀しているふりをしていない。

このように桃水の戀は實ることなく終わった。しかし、桃水との戀愛によって一葉は生涯に愛のどきめきや喜び、それから哀れを覚えることができたのである。そして、社會の規範や倫理の重さに超越できない自分が、女であることを痛感した。

この時期を前後に一葉の創作活動はにわかに活発になり、轉居直後の六月には、『闇櫻』を起稿し、『文學界』に号を追って連載(19号、21号、23号)し、十一月末に最終稿を書き上げている。そして直ぐ『大つごもり』の執筆にとりかかり、その年の暮十二月三十日には『文學界』24号に発表した。和田芳恵氏は、これらのことについて、

『大つごもり』を書いたのは、明治27年だが、29年1月に『たけくらべ』を完成した。この14カ月の間に『にごりえ』も、『十三夜』も『わかれ道』書いた。一葉の奇跡の期間と言えるだろう。  
(和田芳恵『愛の歪み』中央大學出版部、昭和44年7月 p198)

とのべていることはよく知られている。

この奇跡の期間の作品の中で、『大つごもり』『わかれ道』等は戀を中心としたものではないが、その他は戀がテーマになっている。

一葉は『たけくらべ』に遊女になる運命から逃れることが出来なかった美登利と、その運命を前にして、運命だからこそ別れなければならなかった信如との悲戀を哀れにきよらかに語った。

『にごりえ』では、『にごりえ』という言葉が示しているように、泥沼の中で生活している銘酒屋の娼婦お力、妻の座にあるお初も、源七をめぐる愛の悩み抱えるところに女の宿命的な悲しさを語った。

『十三夜』のお關は、鬼のような夫と別れる決心をし、「内職なりなんなりして」生きるつもりで夫の家を出た。その時、夫の横暴さに反撃し、再出發への期待があったはずである。しかし、お關は父親に「親のため、弟のため、太郎という子のため」死んだ氣持ちで辛抱するようにとくどかれ思いとどまる。歸り道にのった車の車夫が、かつての戀人であったということも、現實のお關の不幸を少しも軽減するものではない。

このように、作品に共通して見られるのは、戀は戀でもあくまでも悲戀であり、女としての盡きることないはかなさでなつた。

この種の作品が一葉によって描かれ、しかも一葉によってのみ描かれたのは、没落した家の不運、また、桃水とのさまざまな戀の辛酸をへて体得したものであったと言えよう。

彼女の没年の日記『みづの上』(二十九年二月二十日)の記述はよく知られている。

しばし文机に頬づえつきておもへば、誠に我は女なりけるものを、何事のおもひありとて、さはなすべき事かは。(中略)

我は女なり。いかにもおもへることありとも、そは世に行ふべき事かあらぬか。

これは、自分が女であることに對する嘆き、孤獨、虚しさに一葉の戀愛に對する諦念が讀み取れる。

## むすび

一葉日記を全体にみればやはり戀愛の記録という感を捨て難い。また、一葉に小説創作のモチーフや主題たるものを提示してくれたのも多く日記の影響と言える。一葉は日記をもとにして、あるいは日記での習作を通じて、短い生涯の中でも多くの作品を書き上げることができたのではなかろうか。とくに桃水の出會いに始まり離別に至る過程で一葉が経験したさまざまな心の変化が一葉小説に寫され、さらに離別後体得した自分を見つめる力が一葉の實生活にも、「奇跡の時期」に描かれた小説にも、「愛」という主題をより成熟してくれる源になったと思うのである。

## 【参考文献】

- ・木村眞佐幸「日記の虚實—鷗外・一葉文學の基底」『リベラル・アーツ』1993年1月, p.148
- ・塩田良平『樋口一葉』吉川弘文館 1960年7月, p.63
- ・關 良一『樋口一葉考証と試論』有精堂 1974年 9月, p.177
- ・瀧藤滿義『一葉文學生成と展開』明治書院 1998年 2月
- ・『樋口一葉全集 三卷(上)』筑摩書房 1976年 12月, p.150
- ・福田清人・小野芙紗子『樋口一葉』清水書院 1966年 5月, p.40
- ・和田芳恵『近代文學鑑賞講座 第三卷 樋口一葉』角川書店 1958年 11月, p.223
- ・和田芳恵『一葉の日記』福武書店 1986年, p.8

## 【使用テキスト】

- ・『全集樋口一葉 3 日記』小學館 1996年

## 要 旨

一葉が残した小説は二十二編あり、通常書簡文、隨筆五編、短歌三千七百六十首、日記などがある。

一葉の日記は、「日次の日記」、「文學日記」、「戀愛日記」というさまざまなテーマをもっているが特に戀愛日記の中で見落としてはならない事の一つとして半井桃水との戀愛がある。

桃水との交流のなかで、その想いを認めていく女流日記獨特の浪漫的な味を日記の中に醸し出しているの

である。また、桃水との出會いによって一葉自身が女であることを痛烈に感じたに違いない。そして、それは作家としての戀愛觀を育てる上に重要な意味を成し、小説創作のモチーフや主題であるものを提示してくれたと言える。

キーワード：貧乏脱出, 半井桃水, 厭ふ戀, 諦念, 私小説, 女の變

투 고 : 2004. 5. 31  
1차 심사: 2004. 6. 12  
2차 심사: 2004. 7. 3

住 所 : (110-743) 서울시 종로구 홍지동 7 상명대학교 사범대학 일어교육과  
電 話 : 02-2287-5118  
E-mail : smpn@smu.ac.kr